

-2023 年度教育職員特別研修報告書-

- ・法学部教授 大川 四郎 1【報告書】
(ジュネーヴ州立大学法学部)
- ・法学部教授 岡田 健太郎 2【報告書】
(レジャイナ大学)
- ・現代中国学部教授 梅田 康子 3【報告書】
(桜美林大学グローバルコミュニケーション学群)
- ・国際コミュニケーション学部教授 永田 道弘 4【報告書】
(パリ 1 3 大学)
- ・文学部教授 漆谷 広樹 5【報告書】
(愛知教育大学国語教育講座)
- ・文学部准教授 ヤング アンソニー 6【報告書】
(サザンクイーンズランド大学)

教 育 職 員 特 別 研 修 実 績 報 告 書

研 修 者	大川 四郎	
所 属 ・ 職 名	法学部教授	
研 修 期 間	2023年4月1日 ～ 2024年3月30日（365日間）	
研 修 の 種 類 ※ 該当に○をつける。 (複数可)	1. 自宅特別研修（自宅から研究機関に通う研修） 2. 国内特別研修（移住して研究機関に通う研修） ③. 海外特別研修（海外の研究機関において研究する研修）	
研 修 課 題	20世紀スイスにおける国際人道法生成発展の歴史に関する研究	
研修内容の概要	研修出発前に提出した教育職員特別研修計画書、および2023年度個人研究費計画書において、以下の5点を述べた。 第1には、ルネ・マルグリット・フリック・クラマー女史（赤十字国際委員会（以下、ICRC と略）委員(1917-1946)）が「捕虜条約」（1929年）および「東京宣言」（1935年）にどのように寄与したか。 第2には、「第二次世界大戦中の日本軍占領地における赤十字国際委員会代表の活動について」（科学研究費助成研究（基盤研究(C)、課題番号20K01247、令和2～5年）と題する研究課題の推進である。 第3には、フリッツ・パラヴィチーニ医師（1874-1944。1942年から1944年まで ICRC 駐日代表部首席代表）に関する個人史研究である。 第4には、初代 ICRC 総裁ギュスターヴ・モワニエが著した『戦争と慈悲（人道）』の新訳である。 第5には、ピエール・マルケス著『スペイン内戦中の赤十字活動―人道主義の戦士らの足跡（1936-1939）』の翻訳である。	
研修成果の概要	主たる研修場所である ICRC アーカイブには、膨大な関連史料が所蔵されていた。1年間の研修期間を有効に活用するために、上掲の5課題のうち、報告者（大川）は第2課題の研究に専念することにした。実際のところ、同課題のうちでも、第二次世界大戦中の上海、香港に駐在した ICRC 代表4名に関する史料を完全に閲覧、分析にするだけで、ほぼ1年間に要してしまった。詳細は別紙リポートを参照されたい。 なお、第1課題は、第2課題の中でも部分的に研究した。第3課題については、前掲別紙レポート脚注にて言及しているように、パラヴィチーニ出身地であるグラーリス州公文書館専門調査員に連絡を入れ、幾つかの情報を提供いただいた。第4課題、第5課題は、それぞれ、継続中である。	

教 育 職 員 特 別 研 修 実 績 報 告 書

研 修 者	岡田 健太郎	
所 属 ・ 職 名	法学部 教授	
研 修 期 間	2023年 8月14日～ 2024年 8月 13日 (366日間)	
研 修 の 種 類 ※ 該当に○をつける。 (複数可)	1. 自宅特別研修 (自宅から研究機関に通う研修) 2. 国内特別研修 (移住して研究機関に通う研修) 3. 海外特別研修 (海外の研究機関において研究する研修)	
研 修 課 題	先進民主主義諸国における政治制度としての立憲君主制の比較制度分析	
研修内容の概要	岡田健太郎の専門は政治学であり、とりわけカナダをはじめとする旧英領諸国の比較政治を専門としている。これまで、①カナダにおける政党システムの変容、②独立調査委員会制度の比較研究、③立憲君主制の比較分析の三テーマを軸に研究を進めてきたが、今回の特別研修期間は、上記の三テーマのうち③を中心に研究を行い、さらに関連するさまざまな論点についても研究を行うことができた。	
研修成果の概要	今回の特別研修中の研究成果については、Research Map の岡田ホームページに (https://researchmap.jp/okdkntr) に随時掲載し、論文についてはダウンロード可能としているほか、本学の研究者情報データベースにも掲載している (https://edu.aichi-u.ac.jp/tsearch/AUT_detail.aspx?pid=11457 2023年度分まで)。 特別研修期間の研究成果は、論文2本、学会・研究会報告3回、学会報告にともなうペーパー1本である。それぞれの研究成果の内容については別添リポートで紹介するため、ここではこれらの業績一覧を提示する。①「旅行メディアにおけるカナダの魅力 『るるぶカナダ』シリーズと『ことりっぷカナダ』シリーズの主要部分の分析」 岩田晋典、岡田健太郎 文明21 (51)、②Comparative Institutional Analysis of Constitutional Monarchy in Canada and Japan: Advocate of Democracy or Detriment to Democracy? Canadian Political Science Association Annual Conference, McGill University, Montreal, Quebec, Canada 2024年6月14日、③Comparative Analysis of Royal Commission/Public Inquiry Systems: Lessons from Canada for Japan、Kentaro OKADA、Visiting Faculty Member Presentation, Hill and Levene School of Business, University of Regina 2024年1月19日、④The Appeal of Canada in Travel Media for Women: Focusing on the “Rurubu Canada” Series. Shinsuke IWATA, Kentaro OKADA Japanese Studies Association of Canada, Annual Conference, University of Saskatchewan 2023年9月30日、⑤Is Constitutional Monarchy a Friend or Foe of Democracy? A comparative Institutional Analysis of Canada and Japan, Kentaro OKADA, 愛知大学法経論集第241号、2024年12月 (掲載確定)	

教 育 職 員 特 別 研 修 実 績 報 告 書

研 修 者	梅田 康子	
所 属 ・ 職 名	現代中国学部 教授	
研 修 期 間	2023年 4月 1日～ 2024年 3月 31日 (366日間)	
研 修 の 種 類 ※ 該当に○をつける。 (複数可)	①. 自宅特別研修 (自宅から研究機関に通う研修) 2. 国内特別研修 (移住して研究機関に通う研修) 3. 海外特別研修 (海外の研究機関において研究する研修)	
研 修 課 題	現代的ニーズにマッチした言語学習支援の事例の収集と理論的検討	
研修内容の概要	1. SALC 等における留学生の自律的日本語学習支援 ・SALC に関する文献の収集と閲読 ・国内の大学に設置された自律的言語学習スペースの視察 2. 社会状況の変化に伴う自律的言語学習ニーズの変化 ・学術文献に限らず、社会状況の変化に関する情報を幅広く収集 3. COVID-19と現代的ニーズ ・コロナ前及びパンデミック期における現代的ニーズの振り返り 4. 「学習環境としての教師」研究 ・オートエスノグラフィーの研究会等に参加 5. 新法 (日本語教育の推進に関する法律) 施行と現代的ニーズ ・新法の背景にある現代的ニーズについて、齋藤伸子教授と議論	
研修成果の概要	1. SALC 研究の文献閲読及び現地視察の成果 1) SALC の理念を支える「自己決定理論」と「成人教育学」及び「学習者オートノミー」の整理、2) SALC の発展と転機の概観、3) SALC 成功のための要件の考察を行った。魅力ある SALC とは、利用者だけでなく運営側も楽しく過ごせる場である。(詳細はレポートをご参照ください) 2. コロナ以前の現代的ニーズ 2019年に発表した研究をもとに、コロナ前の日本企業が外国人社員に求めていた態度・能力を検討。「日本語初級レベルの留学生の就職」という題目で話題提供を行った (2023年5月14日「これからの日本語教育 - 21世紀の学びと日本語教育の関係は - 」@石川県 NPO 活動センター)。 3. パンデミック期の現代的ニーズ パンデミック期の授業実践を同僚との共著で本学語学教育研究室紀要『言語と文化』49号に発表 (「制約付き多読授業における自律性支援の試み」95-115, 2024年1月発行)。3月19日リポジトリ公開。5月28日現在、55ビュー (日本17, 米国36, 中国2) 4. ポストコロナ時代の「現代的ニーズ」の検討 JSL 環境にある日本語学習者に対する社会のニーズ及び日本語学習者本人の学習ニーズを検討した。10月に小規模な研究会を開催し、「現代的ニーズにマッチした言語学習支援を考える」という題目で成果発表を行った (2023年10月30日「日本語教育の明日～現在・過去・未来をつなぐ～」@愛知大学)	

教 育 職 員 特 別 研 修 実 績 報 告 書

研 修 者	永田 道弘	
所 属 ・ 職 名	国際コミュニケーション学部・教授	
研 修 期 間	2023年9月4日～2024年9月3日（366日間）	
研 修 の 種 類 ※ 該当に○をつける。 (複数可)	1. 自宅特別研修（自宅から研究機関に通う研修） 2. 国内特別研修（移住して研究機関に通う研修） ③. 海外特別研修（海外の研究機関において研究する研修）	
研 修 課 題	ナチ占領下のフランスにおける文芸映画と検閲の相関関係についての研究	
研修内容の概要	2023年度のサバティカル期間を活用し、フランス・パリ13大学にて在外研究を実施。研究の主題は、20世紀における戦争と文学・芸術の関係性の探求であり、特に第二次世界大戦中のフランスにおける探偵小説の映画化作品に焦点を当て、当時の検閲体制が作品に与えた影響を検証することを目的とした。本研究は、20世紀文学・芸術の専門家であり、シュルレアリスム研究に造詣の深いパリ13大学のマルク・コベール教授の指導の下で行われた。 本研究の目的は、戦争が文学・芸術に与える影響を探ることである。具体的には、ナチス占領下のフランスにおいて制作された探偵小説の映画化作品を対象に、当時の政治的・社会的制約がどのように創作活動に影響を及ぼしたかを明らかにすることを目指した。ヴィシー政府による検閲体制のもとで、探偵小説という娯楽作品がどのように表現規制を受け、どのようにその制約に対応しつつ制作が行われたかを分析することが研究の焦点であった。	
研修成果の概要	フランス映画史に関するアーカイブ資料を所蔵するシネマテーク・フランスーズ付属図書館にて、戦時中に制作された映画作品のシナリオやコンテ、検閲資料などの調査を実施。 具体的には、ナチス占領下で制作された探偵小説の映画化作品がどのような内容変更を余儀なくされたかについて、検閲資料を通じて検証した。シナリオの変更箇所や、社会情勢を反映した設定の改変などが明らかとなり、政治的圧力が作品内容に具体的に影響を及ぼしていたことが確認された。 戦時下における表現規制が探偵小説の映画化作品に及ぼした影響を詳細に明らかにすることができた。また、娯楽作品である探偵小説が、戦争という時代背景の中でどのように意味を持たされたかについて理解が深まった。	

教育職員特別研修実績報告書

研 修 者	漆谷広樹
所 属 ・ 職 名	文学部 教授
研 修 期 間	2023年 4月 1 日～ 2024 年 3 月 31 日（ 366 日間）
研 修 の 種 類 ※ 該当に○をつける。 (複数可)	①. 自宅特別研修（自宅から研究機関に通う研修） 2. 国内特別研修（移住して研究機関に通う研修） 3. 海外特別研修（海外の研究機関において研究する研修）
研 修 課 題	日本語形容詞の語構成についての通時的研究
研修内容の概要	1 中世以降の形容詞語彙語構成の解明（語構成について） これまで十分には捉えられていなかった」中世以降の形容詞はどのような語構成であるか、またどのような方向への変化であるのかについて明らかにするべく取り組んだ。 2 形容詞の通時的な変化の解明（意味用法の変化について） 通時的な研究対象となりえる形容詞について、その発生時期から現代に至るまでの変化についてどのように捉えられるのかについて明らかにするべく取り組んだ。
研修成果の概要	研究内容1 中世以降形容詞語構成の解明については、中世形容詞についてその構成を単純形容詞（動詞起源の場合、動詞以外が起源の場合）、複合形容詞、重複形容詞、派生形容詞（接頭辞による場合、接尾辞による場合）に分類し、それぞれがどのように発達、又は衰退しているのかについて、各状況に分けて観察し、その要因を考察した。 内容1については『文学論叢』（第161輯 2024年3月 愛知大学人文社会研究所 p 29 - 52）に論文（査読付き）で発表した。 研究内容2 形容詞の通時的変化の解明については、通時的観察が可能である「～クサイ」について、中古から現代までの観察を行い、その意味の変化や、上接要素の変化について解明した。 内容2については『一般教育論集』（第62号 2024年3月 愛知大学一般教育研究室 p 11 - 22）に発表した。

教 育 職 員 特 別 研 修 実 績 報 告 書

研 修 者	ヤング アンソニー	
所 属 ・ 職 名	文学部・准教授	
研 修 期 間	2023年 4月 1日～ 2024年 3月 21日 (346日間)	
研 修 の 種 類 ※ 該当に○をつける。 (複数可)	1. 自宅特別研修 (自宅から研究機関に通う研修) 2. 国内特別研修 (移住して研究機関に通う研修) ③. 海外特別研修 (海外の研究機関において研究する研修)	
研 修 課 題	Using Machine Translation in the EFL classroom EFL の授業で翻訳ソフトを使う	
研修内容の概要	この研修では、EFL の教室環境における L2学習促進のための翻訳ソフトの有効性を測定した。サザン・クイーンズランド大学のソン教授の協力を得て、教室での翻訳ソフト使用に関するデータ収集を行いました。第1回目のデータ収集では、翻訳ソフトとオンライン辞書を比較し、どちらが翻訳タスク中にメタ言語的認識を育むのに優れているかを調べました。データ収集の第2ラウンドでは、ライティング・タスク中にメタ言語的認識を促進する翻訳ソフトの能力がテストされました。	
研修成果の概要	データの結果について2つの国際学会で発表した。ひとつはアイスランドで開催された EUROCALL2023で、もうひとつはチェンマイで開催された ThaiTESOL2024です。Language Teacher Research Journal と EUROCALL 会議録に論文を発表しました。また、今年の ThaiTESOL 会議録にも研究結果に関する論文を発表する予定です。	